

René Arcosの日本人読者へのメッセージ ——Romain Rolland理解への一助として——

高橋 純

ルネ・アルコス (René Arcos, 1880年9月16日 - 1959年7月16日) は、フランスクリシー出身の詩人・作家。1906年にフランスの詩人、作家のジョルジュ・デュアメル(Georges Duhamel, 1884-1966)、シャルル・ヴィルドラック(Charles Vildrac, 1882-1971)、ジュール・ロマン(Jules Romains, 1885-1972)と共にアベイ派(Groupe de l' Abbaye, 1906)を創立したとして名高い。第一次世界大戦後、1922年頃に作家のロマン・ロランと共に雑誌『ウーロッパ』(*Europe*)を創刊し、1940年の休刊まで主幹となった。またロマン・ロランに私淑し、その作品と思想の普及を主目的として自ら出版社(éditions Saplier)を起こした。

そのアルコスが生前日本人読者に向けて記した手稿が見つかった。A3版の白紙を二つ折りにし、左側余白を大きくとって計3ページにわたって書かれたこの手稿は、彫刻家高田博厚(1900-1987)の没後残された書簡類の間に紛れていたものであり、筆者による発見は2018年春である。明らかに公表を前提として書かれたにもかかわらず、この一文が邦訳され、過去に公刊された本や雑誌に掲載された形跡はない。なぜアルコスは日本人読者に向けてこれを書こうと思いついたのか。それを理解するためにはまずもってその内容を確認しなければならない。

以下がその全文の邦訳である。

René Arcos, texte écrit en 1950 (邦訳)

ロマン・ロランの思い出として書かれたこの一文の日本語訳の前段の体裁で記しておきたいことがある。その後私が「我が日本の友」と呼ばせてもらえる人々の大方とつながりを持つことができるようになったのはまさにロマン・ロランのおかげなのである。まず私の翻訳者である高田、次いで片山 [敏彦]、長谷川 [鉄一郎]、上田 [秋生]、朝吹三吉、さらに今度はこの彼らが帯同し我が家を訪れた多くの人たちである。

常々ロマン・ロランは東洋に惹かれていた。その悠久の文化に、その芸術家たちに、その思想家に、その神々に関心を寄せていた。ガンジー、ラビンドラナート・タゴール、シュリ・オーロピンド・ゴシュといった人々をロランは現代インドの最高の賢人と評価して、彼らとは友愛と敬愛に満ちた絆を結んでいた。インドの神秘思想をめぐる彼の著作は忘れられてはならないものだ。

あらゆる人々を愛したこの人物、そしてまたさらに愛し理解しようと努めたこの人物はまさしく全宇宙の心と共振する心の持ち主だった。彼にとっては無縁なよそ者という言葉はおおよそ意味を持たなかった。彼は、世界にはいるのは一人の人間、つまり大文字の「人間」のみが存在するのだと信ずる者の一人だった。

しかしながら、周知のことだが、世に跋扈する主戦論者や武器製造業者たちは、この信念を

枉げないロランを決して容赦しないのだ。彼を貶めることができないとなると、連中は手を尽くして彼の存在を矮小化しようとする。例えば近頃またしても、我々文筆業者の間でいささかの評価を得ているあるフランス人の老作家がいけしゃあしゃあと言っているのだ、第一次ヨーロッパ大戦勃発直後の1914年にロマン・ロランが著した『戦乱を超えて』はドイツ人が褒めちぎるところとなった論集なのだ。これこそ根も葉もない嘘っぱちである。その論集に載った記事はいずれもドイツ人を激昂させたものであり、そこで彼らはその一部を適当につなぎ合わせて全く意味の違うものとして吹聴することしかしなかったのだ。1950年の現在いまだにドイツには『戦乱を超えて』の翻訳は存在していない。アレマン語圏スイスの一出版社が翻訳を出そうとしたが、ドイツ当局から圧力がかかって断念せざるを得なかったことがあるほどなのだ。

過去には、『ジャン・クリストフ』の翻訳に最初に手を出したのはドイツの出版社だと触れ回って、これを理由に人は思いつく限りの不愉快なコメントを作者に加えたのだった。実は『ジャン・クリストフ』の最初の翻訳を手掛けたのはスペインの一出版社だったのだ。

今この場で、かつて存在した最も気高き人の一人であるロマン・ロランの名声を汚すことに躍起になる連中の悪意の証拠を数えあげようとしたらきりが無い。それにまた、彼の名に唾する連中の多くは彼のものを何一つ読んではいはしないのだ。私としてはむしろここに小さな逸話を一つ紹介しておきたい。私の友人の一人は熱心なクリスチャンで、従って根っからの平和主義者なわけだが、その彼が1915年のある日、塹壕で重傷を負ったために帰還した折に陸軍大佐の地位にある叔父と出会った。この叔父は以前に『ジャン・クリストフ』を読んでいく感動し、作者ロマン・ロランの肖像写真を自分の書斎のとおきおきの場所に飾るほどだったのだ。

しかし彼は、当時我々皆に向けられたおぞましい新聞雑誌が伝える『戦乱を超えて』についての話を聞かされた。1916年にロマン・ロランがノーベル賞を受賞した時には、当時もっとも読まれていたフランスの新聞がこのニュースを「ユダが手にした銀貨5枚」と大見出しで報じたのだった。しかしこの新聞はなんとまた、対ドイツ敗戦となるや、1940年には戦勝国ドイツにへつらうようになったのだ。かの大佐はロマン・ロランの肖像などもう書斎から引っ込めようと決めて甥っ子に言った、「彼は酷いことをしてくれたものだ。」

「酷いことって、誰に対してなんですか？」と甥っ子は聞き返した。「どんな人に対してなんですか？」

数日後その甥っ子は、山ほどの障害を乗り越えてついに出版にこぎつけた『戦乱を超えて』の完全版を叔父の大佐のもとに届けた。

若き兵士である甥っ子が生後叔父の大佐のもとを再訪した時、叔父は彼の手を取って自分の書斎に導いた。するとそこにはロマン・ロランの肖像写真がもとあった場所に戻されていたのだった。

大佐は彼に語った、「私は『戦乱を超えて』を読んだのだよ。そこには、私が今でもそうであるようなフランスの旧き愛国者を傷つけるような言葉は一つたりともありはしなかった。それどころかこれは、全人類の友であり同胞である本当のクリスチャンが読むに値する最良の書なのかもしれない。」

ロランの敵対者はその死後であっても攻撃の手を緩めない。彼〔の名声〕が世にのさばっている。数多の口さがないへば作家やネタ切れの三文記者にはそれが面白くないのだ。しかしそんな連中の言うことにおよそ意味はない。

ロマン・ロランが存在した「事実」は爾後全人類の所与である。たとえその姿にいささかの歪曲を施して見せたところで、何者もこの偉大な存在を我々人類から奪うことなどではしないだろう。

ルネ・アルコス

一読すれば明らかなように、この文章は1950年に書かれ、それが見つかった経緯からして高田博厚に託されたものであろうことがわかる。第二次世界大戦末期にパリからベルリンに移送された高田博厚はこの年にはパリに帰還して安定した市民生活を送っており、日本との交流も回復していたが、彼自身は1958年まで日本に帰ることはなかった。それはつまり、高田は1850年にフランスでアルコスから託されたこの文章をずっと所持し続けてその後日本に持ち帰り、これを公表することなく、高田の死後今日に至ったことを意味するのだと言える。では高田は最終的にはアルコスとの「約束」を果たさなかったのだろうか。

上記邦訳を掲げたアルコスの文章を読み返してみよう。書き出しは「ロマン・ロランの思い出として書かれたこの一文の日本語訳の前段の体裁で記しておきたいことがある」と始まっている。ここから分かるのは、手稿のまま残されたアルコスの上記の文章は、これとは別のそしてこれに先行する「ロマン・ロランの思い出として書かれたこの一文」（この一文の翻訳者は高田となるはずだ）の理解を補足するものとして書かれているということである。すると、上記のアルコスの文章はこの「ロマン・ロランの思い出として書かれたこの一文」（これも無論アルコスが書いたものであるはずだ）と併せ読まれるべきものとして書かれているということである。そして1950年に書かれた上記のアルコスの文章が（少なくともこの時点で）公表されなかったのは、それに先行する「ロマン・ロランの思い出として書かれたこの一文」が（日本語訳として）公表されていなかったことを暗に示している。

そこで今度は上記の文章を併せて日本の読者に提示したいとアルコスが感じた「先行する一文」とは何かを知らねばならない。アルコスは正確なタイトルを示していないが、彼には確かに「ロマン・ロランの思い出」*Les souvenirs de Romain Rolland*と題された一文がある。この文章はロマン・ロランの生誕60年を記念してロランに捧げられた「ウーロッパ」誌（1926年2月、ロマン・ロラン記念特集号）に寄せられたものである。この文章は無論ロマン・ロランを、博愛精神と愛国心を等しく合わせ持つゆえに断固たる反戦平和の主張を翻すことのない思想家として称えるべく書かれたものだが、併せてこの大作家に対する、愛国者を装う右翼主戦論者側からの誤解、無理解、攻撃の実態を詳報するものともなっている。この後者の半面については、ロマン・ロランという作家を一面的に利生主義的平和論者としてとらえ、ノーベル賞受賞者であるからしてフランス国民から支持され敬愛されていると「誤解」しがちな日本人読者にとっては意外な、いささか理解しづらい情報となっている。それが1926年という第一次世界大戦がまだ古い記憶となっていない時期のことであれば、反戦平和思想と好戦的ナショナリズムの間で、ロマン・ロランの評価を二分するような状況もありえたのかと思わせるのだが、アルコスが書いた上記1950年の原稿は、第二次世界大戦を経験したフランスの現状においてもいまだ事態は変わっていないことを告げている。アルコスはこのことを日本人読者にも理解してもらおうべくこの文章を書いたのだろうと理解できるのだ。

アルコスが高田に託したこの文章は結局日の目を見ることはなかった。しかしその後の事実

経過はどうであったかという、アルコスの「ロマン・ロランの思い出」は日本語に訳され、1971年に日本で公表された。それは、筑摩書房刊世界文学大系のうちの高田博厚訳『ジャン・クリストフ』(2巻)の付録のかたちで出版されたのだった。(ただしこの時の翻訳者は西本晃二氏である。)

高田博厚は渡仏後ルネ・アルコスと知り合い生涯の友となった。そして二人ともロマン・ロランを精神の師と仰いで敬愛していた。アルコスが書いた「ロマン・ロランの思い出」は母国フランスでのロマン・ロラン評価(理解・誤解・無理解)の実態を知ることのできる貴重な資料である。高田とアルコスの間でこの「一文」を日本人読者に知らしめることに意義ありとの理解があっただろう。その際には時代の変化(1926年から1950年)を考慮して補足的な文章を添えるのもよいかもしい。そこでアルコスはその補足的な一文を手稿として高田に託した。しかし高田が最終的に日本に戻ったのは1958年であり、時代的にみてその時日本でアルコスの文章(「ロマン・ロランの思い出」と補足的な手稿)を単発的に公表する意義はどれだけあったろうか。少なくとも事実としては公表には至らなかった。しかしその後、日本には『ジャン・クリストフ』の翻訳はすでに三つ存在していたのだが(豊島与志雄、片山敏彦、新庄嘉章)、高田が請われてもう一つの邦訳(筑摩世界文学大系)を手掛けるに至った際に、高田はアルコスとの「約束」を果たす意図を込めて「ロマン・ロランの思い出」を自分のあとがきとともに付録として添えようと図ったのであろうと推測されるのである。

1950年に書かれたと判断されるRené Arcosの手稿(3葉)

Au début de la traduction japonaise de cet écrit consacré à la mémoire de Romain Rolland, il me est agréable de noter que c'est surtout grâce à lui que je devins entre en relations avec le plus grand de ceux que j'ai pu appeler par la suite : mes amis japonais. D'abord, mon traducteur, Bakata, puis Katagawa, Hasegawa, Nida, Jankiti Asabuki, et tant d'autres qui m'entraînèrent à leur tour vers ma maison. De tout temps, Romain Rolland fut attiré par l'Orient. Sa très ancienne culture, ses artistes, ses penseurs, ses dieux. On connaît l'amitié et l'admiration affectueuse qui l'ont lié à ces hommes comme Gandhi, Rabindranath Tagore, Sri Aurobindo Ghose qu'il considérait comme le plus grand sage de l'Inde de nos jours. On n'a pas oublié les ouvrages qu'il a écrits sur le spiritualisme de l'Inde. Cet homme qui aime et s'efforce d'aimer et de comprendre tous les peuples avait un cœur qui battait vraiment à l'unisson avec celui de l'univers. Il se accorda jamais à aucun sens au mot étranger. Il était de ceux qui sont persuadés qu'il n'y a qu'un homme au monde : l'homme.

On sait que les bellicistes et fabricants de matériel guerrier de tous les pays ne le lui pardonnaient point. Ne pouvant le saisir, on tenta de le démunir par tous les moyens. Ainsi, dernièrement encore, un vicil écrivain français, qui jouit d'un certain crédit parmi nos hommes de lettres, affirmait et frontalement que les Allemands "avaient porté aux nues" Au-dessus de la Meuse, cette suite d'articles que Romain Rolland écrivait en 1914, au début de la première guerre européenne. Messonge gratuit, ces articles ayant, au contraire, ébloués les Allemands qui n'en reproduisirent jamais que des extraits tronqués qui en modifiaient complètement le sens. Aujourd'hui encore, en 1950, au cours d'une traduction de Au-dessus de la Meuse réalisée en Allemagne, un éditeur de la Suisse allemande ayant tenté d'en lancer une traduction se vit obligé de y renoncer devant la pression des autorités de l'Allemagne.

" j'ai lu Au dessus de la Meuse, dit le Colonel à son neveu. Il me contient pas un mot qui puisse haïr le vieux patriote de France que je possède à être. Et c'est peut-être le meilleur livre qu'un vrai chrétien, ami et frère de tous les hommes puisse lire aujourd'hui. Les adversaires de Rolland, par cela sa mort, n'ont pas désarmé. Il a pris trop de place dans le monde. Des myriades d'amis plumeux et de folliculaires en mal de copie ne s'en consolent pas. Cela est sans importance.

Le fait Romain Rolland appartient désormais à toute l'Humanité. On n'arrivera pas à la disposition de ce grand usage, même si l'on parvient à le défigurer quelque peu.

Rene Arcos.

On avait déjà prétendu que les éditeurs allemands avaient été les premiers à traduire Jean Christophe en accompagnant cette assurance de tous les commentaires de sottise qu'on peut imaginer.

Or, la première traduction de Jean Christophe fut faite par un éditeur espagnol.

Mais, moi n'en fus rien pas si moi voulais exposer ici les preuves de la mauvaise foi de tous ces hommes acharnés à souiller le renom de celui que l'on peut considérer comme l'un des hommes les plus nobles qui aient jamais existé. Beaucoup d'autres qui crachaient en le nommant, n'avaient jamais rien lu de lui. Je raconterai ici une petite anecdote. Un de mes amis, fervent chrétien, et de ce fait profondément pacifiste, est un jour, en 1915, au retour de France, il avait été sérieusement blessé, avec un de ses oncles, Colonel aux armées. Cet homme avait lu Jean Christophe et avait conçu pour Romain Rolland une vive admiration qu'il avait mise en bonne place son portrait dans sa bibliothèque. Depuis, il avait entendu parler du livre Au dessus de la Meuse, par l'infâme presse que nous devions alors subir. Qu'on se souvienne qu'en 1916, au moment où Romain Rolland reçut le prix Nobel, un de nos journaux les plus répandus annonça la nouvelle sous ce titre, en énormes caractères: Les Cinq deniers de Judas. Le même journal devait d'ailleurs en 1916 se mettre de la défaite. Au service de l'Allemagne vainqueur. Le Colonel avait eu devant lui le portrait de Romain Rolland de sa bibliothèque en disant à son neveu: Il a fait tant de mal!

De mal, à qui? répondit son neveu. A quelle sorte de qui?

Quelques jours après le neveu apportait à son oncle une édition de Au dessus de la Meuse qui, après mille difficultés, avait fini par paraître dans son intégralité.

Quand le jeune soldat revint chez son oncle, celui-ci lui prit la main et le conduisit à sa bibliothèque où le portrait de Romain Rolland avait repris sa place.